

【武蔵野学院大学ニューソロジー研究所】研究動画シリーズ#014(砂子)(22:32)(2022/08/30)
「存在論的差異を媒介する自他」

【武蔵野学院大学ニューソロジー研究所】研究動画シリーズ#014(砂子)(22:32)(2022/08/30)
「存在論的差異を媒介する自他」



Research
Announcements
#014

存在論的差異を媒介する自他

 武蔵野学院大学ニューソロジー研究所

announcer 砂子 岳彦

存在論的差異を媒介する自他

砂子 岳彦

それでは始めさせていただきます。みなさん、こんにちは。きょうは「存在論的差異を媒介する自他」というテーマで話をさせていただきます。

この材料になっているのは、ハイデガーの『野の道』という、そういうエッセイがあるんですけども、それを題材にしてということになりますので、よろしくお願ひ致します。

このモチベーションになっているのが、あの田邊元(たなべはじめ)なんですけれども、田邊元というのは数理哲学というか西田の弟子として活躍したちょっと知の巨人のような人ですね。ハイデガー同様にと言いますか、大きな仕事、あるときはハイデガーよりも先んじて仕事をし、ハイデガーを超えた部分もあると思ってるんですけども、これまたハイデガー同様に何か汚点を持ってまして、学徒動員をなんか指示するような、そういったところで、あまり評価されてないのかもしれないけれども、終戦後は懺悔、懺悔道、懺悔の方向に行くんですね。まあいずれ田邊については語りたいたいと思うんですけど、語れるほどではないので、モチベーションは田邊元にありますと。で、田邊元がですね。あの交互否定的統一。物理で言うと相補性のことなんですけれども、交互否定的な統一ということ言ってるんですよ。それはどういうことかと言うと、観察というのは、主観とか客観があって、主観が客観を映しているっていうふうな印象、俗にそういう図式で捉えられてるけれども、両者の交互否定的統一の所産であるというふうにバチッと切り切ってるんですね。で、その続きで、その論そのものはメルロ＝ポンティの可逆性、あるいは、それこそ、ボーアの相補性に繋がるものなんですけれども、量子力学の解釈に、それがつながっているというところがあるんですね。で、量子力学と言うと、マイクロ量子系と古典系というものの対比で捉えられていて、こちら側に量子力学があって、これは古典力学があると。それ全然違うものなんですよ。違うものなだけで、田邊によれば、この2つの間にも相補性、つまり、交互否定的統一があるんだよということがある。

で、これは、きょうお話しする、存在論的差異、つまり、存在と物ということに対比できるというのが今回の発想なんですよ。で、田邊によると、その主観と主観と客観というものがあるとしたら、それを媒介するものがあると。媒介するものは、主体とか身体とか言われてるけど、身体って言っても、肉体ではない、肉体ではないですけどね。その観察する自分自身そのもののあり様がそこにあってそれを時間と空間が媒介するということになります。すると、その存在と存在者というものがどういうふうに関係されるかということになると、物理学では測定装置っていうのがその間にありまして、測定装置が身体に代わりますと、測定した結果が得られるということになります。だから、量子力学系においては、決定論的に波動方程式で決まって、ところが、波動そのものを見ることはできませんので、測定装置にかけて、測定の結果、粒子がどこにあったとか粒子の速度がどうだったかというのを調べる。古典的な考えがこっち側にあるとすると、量子力学というものと古典力学というものをどうやって調停したらいいのかと。アインシュタインに言わせれば、量子力学は完全ではないというふうな見方をして、こっち側を採る人もいれば、量子力学を完全なものだと見て、多世界宇宙論のように、古典力学もそれに従って、構造、世界観を組み立てていくという立場もあるわけですね。ところが、田邊の考えでいくと、交互否定的統一ですから、ちょっとそこところが、相補性と同じでスパッと切ってる割にはよくわからなそうなんですけど。

例えば、無限に長い棒みたいなやつがあると。で、どこでもいいからスパーンと切ると、その棒は右と左というふうに分けられますよね？ で、切らなきゃ、棒は棒で無限に長いわけですよ。で、右の棒っていうのは、左の棒があってこそ、右の棒っていうのがある。左も確かに、半無限の長さの棒があるわけです。そうして考えてみると、あるものが成立するためには、右の棒は左の棒じゃない方というふうに否定的に存在する。だけど、左の棒に助けられてるんですね。定義上、まず左も確かに。そうやって考えると、その切るという行為が、右の棒、左の棒というのを媒介しているということになるかと思います。で、それを量子力学に置いてみると、マイクロ量子系と古典系というものが独立して存在するのではなくて、というふうになります。実験系がある。真ん中に。それを考えている人間がある。で、それがスパーンと一つの大きなシステムを分解したときに、マイクロの量子系とマクロの古典系というふうなものが出て来る。で、それがどっちが正しいかとか言ってるから、わけがわからなくなるんだけど、その両者が支え合って存立しているので、片方だけがということはありません。田邊の考えになります。

で、そうすると、それを存在論的に、存在論で置き換えてみると、存在と存在者、存在するものという物がその存在があって存在者がいない世界、あるいは、存在者があって存在がない世界、そういうことを考えること自体がもし、交互を定的統一の立場からするとあり得ないと。媒介するものがある。見つけやすい。だから。その媒介するものは何だということになると、身体、あるいは、自己と他者というふうに言ってみたいなと思っているのが、今回の話になります。ちょっと画面を共有させていただきますので、ちょっとお待ち下さい。



先ほど申し上げましたように、量子力学ではマイクロ量子系とマクロ古典系が測定装置によって媒介されている。で、マイクロ量子系を測定するとき、状態の重ね合わせは崩壊し、ひとつの状態に収縮して、マクロな古典系に記述される。

量子力学

〈ミクロ量子系—測定装置—マクロ古典系〉

ミクロ量子系を測定するとき、
状態の重ね合わせは崩壊し、
ひとつの状態に収縮して、
マクロな古典系に記述される

で、田邊元は「交互否定的統一」っていうのをそれで捉えようとして、そのそれでというのは、この「量子系と古典系が両方とも支え合っていて、どっちか正しいというわけじゃないと。測定装置のところに身体を置いているわけですね。まあ測定装置は身体の延長だと考えることもできます。それから、身体というのは、それだけで被爆したりなんかすることもできるわけですから、光を見れば光が見えるわけですから測定装置だというふうに考えることもできるわけですね。素粒子を観測しているわけです。


田邊元 「交互否定的統一」

観察は主観が客観を写すのではなく、両者の交互否定的統一の所産である。

で、話はちょっと変わって、ハイデガーの『野の道』というエッセイがあります。これは、晩年のエッセイなんですけれども、ホーフガルデン。これは門があるらしいですね。ハイデガーの故郷です。

一方、道を歩いていくとなだらかな丘を越え、こうした森の中に入っていきんだそうです。それで道はずっと緩やかにカーブしていて、森を抜け、またもう一個丘を越えると、ホーフガルデンにたどりついている。また元来た道に戻ってくると、で、そこの門の扉の蝶番のようになって、入り口出口と入るのを入れて出ていった。

ハイデガー、『野の道』

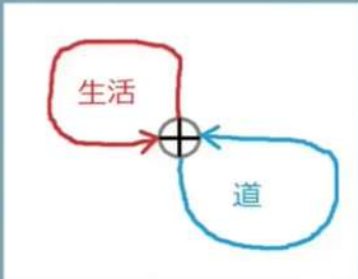


ホーフガルデン門を入り、一本道を歩いていくとなだらかな丘を超え、森の中に入っていく。
森をぬけ、また丘を越えると、ホーフガルデン門にたどりついている。

その野の道でハイデガーはいろいろ思索をしたようですけども。これがいわゆる、これがいわゆる存在の思索、存在の経験、存在そのものの体験を記述しているというふうに捉えてみます。

ハイデガー、『野の道』

生活している家と道は門を媒介している。



そうすると、ハイデガーの、今生活しているいろいろあったと。それで生活しながらホーフガルデンの門を出て、道をずっと歩いていくと、道がまた門に戻ってきてまた生活へと。生活している家と道は

門によって媒介されているわけですね。これ違うな。「家と道は門に媒介されている」ということですかね。

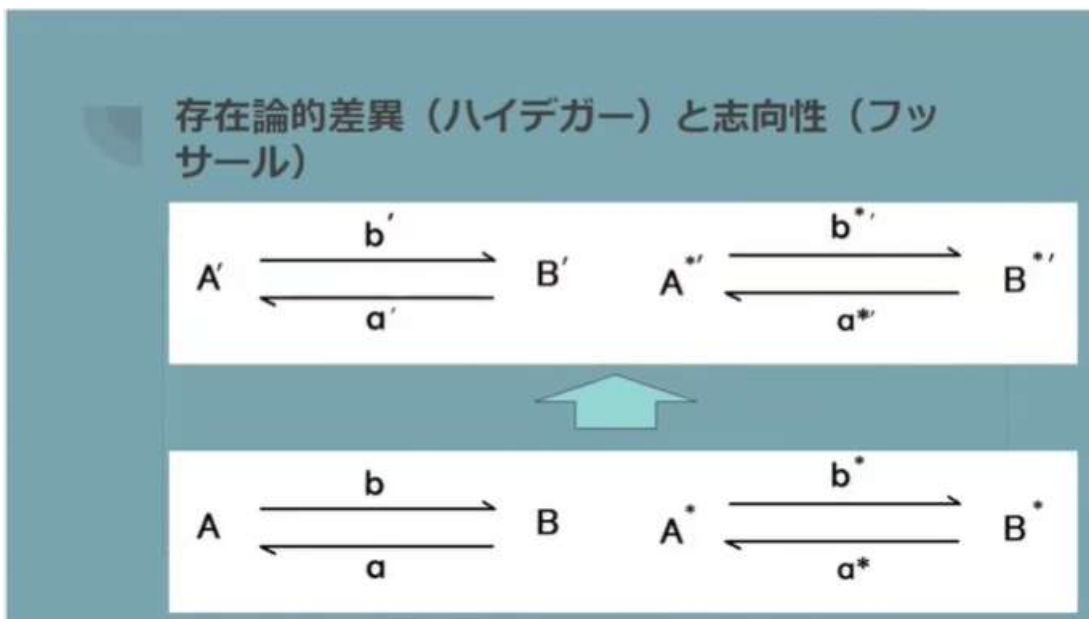
フッサールの自己移入への批判

- 境界線を共有するのであれば、「他なるもの」はシステムの内部に在ることであり、いまだに「同一者」である。(レヴィナス, TI)
- フッサールにあるのは、生についての自己反省である。・・・しかし、この生は考察されるのであって、もはや生きられてはいない。(レヴィナス, PH)

で、その門っていうのは何なのかと。存在と存在者。家は存在者の世界だとして、物に溢れる世界。それから存在っていうのは、門の向こうにある存在の世界っていうのは、物の世界じゃないですね。あるっていうものの、ある世界です。その媒介するものは何かということになるんですけども、自己移入っていうのがねちょっとあのキーワードとして持ってきたんですけども自己移入っていうのはフッサールの論なんですけれども、ちょっとフッサールはまあ基本的に自己反省の世界です。方法論的に自分自身に立ち返るといふ、自分の意識を内省する方向に行くんですけど、そうすると、他者はどこにいるんやというツッコミが入るわけですね。で、この自己移入って言ったって、あくまでも自分の思考の中じゃだけじゃないかという批判が当然出て来ます。レヴィナスなんか一番強烈に批判するんですけども、「他なるもの」はシステムの内部に在ることであり、いまだに「同一者」である。つまり、自己移入できる、その他者というのは、まだまだ自分の思考の範囲の中にいる他者だよ。もっと絶対的な他者が外にいるんですよと、レヴィナスは言う。で、あるいは、フッサールにあるのは、生についての自己反省である。それは自己反省してもいいんだけど、この生は考察されるのであって、もはや生きられてはいない、というような言い方で批判の対象になってくるんですね。で、その批判されている自己移入なんですけれども、次のような図式を持つことによって、存在と存在者の媒介となり得るなというふうに思っているんで、ちょっとこれを見て下さい。

なんか似たようなやつがこうやってあるんですが、一番左下を見て下さい。これが一番原形です。AとBがそれぞれ矢印を持ってます。志向性と。志向性として。で、Bは僕、Aはあなたと思って下さい。他者です。で、スモール a は、僕からあなたへ。スモール b はあなたから僕へというふうに、互いに見て見え姿を得ているわけですね。これが原形です。で、その隣にあるのは何かと言うと、A*と

B*って書いてありますけれども、これは他者にとっての僕で、他者にとってのあなた、つまり、私の方になる。あなたのあなたは私になるんですが、そういう関係を表している。だから、この関係っていうのは、僕とあなたが見つめ合っているけども、僕とあなたが見つめ合っている様子を捉えたのは、左側の図で、他者側でも同じように僕とあなたが見つめ合っているという双対的な関係を表しています。ここまではいいですかね？ 双対的な。これは一番超越論的というか無意識的にやっております。無意識的にやっております。赤ちゃんの頃にね。無意識的ですから、僕とあなたの見つめ合いは、あなたにとっても、見つめ合いだっということが意識されてない。意識されてないです。*系は意識されてないんですが、あるとき、意識したとします。ああ他者も僕を見つめていて、他者の私は、僕にとってもあなただとかというようなちょっと認識を新たにする時期があったとします。そうすると、他者にとっての僕はあなただみたいな感じで自己移入が始まります。自己移入するまでは、これは潜在的に双対的な関係だったんですが、自己移入が始まった途端に一つ上の階層を作ります。一つ上の階層っていうのは、あなたが見ている僕は対象化されています。A*’に対象化されたり、その僕自身の僕もあの対象化された僕。つまり、超越論的次元から経験論的な次元にもう描き始めてる。もう個体としての身体、肉体のあなたと僕の関係をもう1回作り出します。総じてね。つまり、これは何かと言うと、一般には、上の段から始めてみましょう。


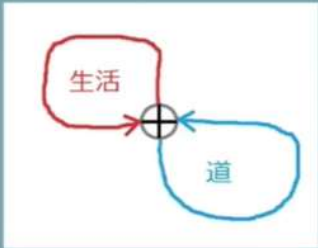


あなたと僕の関係がある。これは、肉体的な関係だと思っております。あなたと。それで、あなた側にもあなたと僕の捉えた関係があるでしょう。両方あります。両方あるんですが、それは対象化された次元での、つまり、物の存在者の世界での関係です。で、存在者の世界は、下の方の存在の関係、これは対象化されてません。作用だけがあるだけです。コトがあるだけ。モノがない。まだあなたの見え姿が見えている経験があったり、まあそういうことですね。経験がある。経験だけがある。音が聞こえる。見え姿がある。とかいう、そういう持続的な世界が下。だから、それをずっと延長して、物自体の世界。物の世界。存在者の世界が、上の世界だとすると、それを支えているのがあるという、受動的指向性の関係に基づく存在のモード。下が存在とすると、上が存在者ということになり

ます。で、これは、なぜ起こったのかということになると、自己・他者の自己移入が最初に起こったわけです。潜在化している他者の関係に、自己を他者との関係に、自己移入した結果、他者から見た自分とかということによって、個体的なものが、そこで浮き上がって来てしまった、ということになりますね。他者に対しても、他者という具体的な見え姿だけじゃなくて、後ろにもあれば、後頭部もちゃんとあるというような、なんかそういう立体的な独立した私たちが、他者というものを上で作り上げるわけです。ということになります。だから、自己移入によって、下から上の世界が、次元階層を作られているので、存在論的差異の媒介は自己移入、あるいは、田邊ふうに言う、身体ということになるのかもしれませんが、もうちょっとはつきりしたのは自己移入であるというふうになります。

日常と道を媒介する蝶番

なかなか人里近くなりにはけりあまりに山の奥をたずねて (柳生十兵衛)



で、ハイデガーが上の世界、つまり、存在者の世界から存在の方に行くというときは、思索によって行ったわけですね。で、それが、ずっと丘を越えて、ずっと存在の世界を学んだ後に、もう一回こっち側に出て来るというような関係になっているというふうに理解致しました。これが先に言った門なんです。ハイデガーが実際住んでいたところ。ハイデガーが当時見た門かどうか知りませんが、というわけで、この存在論的差異を媒介する、この門と言われているものは、自己移入。自己と他者の関係から出て来るということで、存在論的差異を媒介するのは何かというものに一つの答えを与えてるんじゃないかと思っております。で、最後に柳生十兵衛の道歌、道の歌がありますので、ご紹介しますと、

「なかなか人里近くなりにはけりあまりに山の奥をたずねて」


という。彼は剣の修行をずっとしてたら、なんだ普通じゃないかと。これがその答えだったというところなんでしょうね。ずっと奥へ来たら、また元の門に戻ってきたということになるかと思えます。

【武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所】研究動画シリーズ#014(砂子)(22:32)(2022/08/30)
「存在論的差異を媒介する自他」

以上、ご視聴ありがとうございました。これで終わります。(22:14/22:32)(了)

**Research
Announcements**
#014

存在論的差異を媒介する自他

 武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所

announcer 砂子 岳彦

(出典:【武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所】研究動画シリーズ#014(砂子)
<https://www.youtube.com/watch?v=WcUvC-4YKRg>)